

楽観してはならない

北朝鮮情勢

元空将 織田邦男

トランプ米大統領は三月八

日、ホワイトハウスで韓国の鄭義溶国家安全保障室長から金正恩朝鮮労働党委員長との会談の説明を受けた。「金正恩氏が早期の米朝首脳会談を望んでいる」と伝えられ、五月に会談することを即決したという。

その後、「北朝鮮は我々と対話をしている間、ミサイル発射をしないと約束した。それを守ると信じている」とツ

イッターに書き込んだ。

日本の多くのメディアは、「これで戦争の可能性は遠のいた」と楽観的である。某政治家などは、今年度のミサイル防衛関連予算さえ不要ではないかと主張するくらいである。本当に楽観視できるのだろうか。筆者はむしろ、日本に対する危機の度合いは深まったと危惧している。

首脳会談を設定する際は事前に事務方で腹を探り合い、

会談で取り上げる主要事項について細部を詰めて閣僚級会談に持ち込む。閣僚級でも詰め切れない点は首脳同士が会

って決めるのが普通である。事前調整でどうしても溝が埋まらない場合、会談の時期が遅れたり、場合によっては会

談自体がキャンセルになったりすることがある。今回、首

脳会談での合意事項は、すでに出来上がっているとの見方が一部にあるが、トランプ政

権の反応を見る限り、そうでもなさそうだ。

金正恩氏は「非核化」に言及したというが、その真意は不明である。韓国特使との会談後、漏れ聞こえてくる北朝鮮の意向らしきものは、すべて韓国と中国からの伝聞であ

る。今のところ「非核化」について北朝鮮はコメントしていない。

会談決裂の場合

完全な非核化を達成するには、核拡散防止条約（NPT）への復帰、国際原子力機関（IAEA）による査察、核施設や保有核物質の申告、そして廃棄と検証などの具体的措置が欠かせない。その条件を含め首脳会談までには、細部要領等について事務方で詰めておく必要がある。だがこれらを二カ月余りでできるとはとても思えない。

首脳会談は外交手段の最後の砦である。失敗すれば後がない。決裂すれば、もう外交手段はなく、戦争という手段

が残るだけである。

金正恩氏は核を放棄するのだろうか。対話の呼びかけは核ミサイル開発の時間稼ぎに過ぎないという見方もある。もし首脳会談で、トランプ氏

がそのように判断した時、どのような行動に出るかは容易に想像がつく。中間選挙を秋に控えたトランプ氏は、それ

でなくとも前のめりである。裏切られたと分かった瞬間、

一気に戦争へと向かう可能性は高い。

核ミサイル開発に関するこれまでの北朝鮮外交は、国際社会を騙し続けた歴史と言っている。

米国は、今回こそは同じ轍を踏まないという意気込みを感じる。ペンス米副大統領も

「過去の過ちは繰り返さない。北朝鮮に優しくすると、さらなる挑発につながるだけ。すべての選択肢をテーブルに置く」と述べている。

騙しの歴史

これまでの北朝鮮外交は「緊張↓交渉↓合意↓破棄」を繰り返し、取れるものは取り、しかも核ミサイル開発は外交交渉に全く左右されず、粛々と継続してきた。これまで六回にわたる騙しの歴史を簡単に振り返ってみよう。

一回目は一九九二年の核疑惑である。八五年に核兵器不拡散条約（NPT）に加入した北朝鮮は、九一年九月十七日に韓国と同時に国連加盟を果たし、翌九二年には国際原

子力機関（IAEA）保障措置協定に調印した。だが九二年頃から北朝鮮の核開発に対する疑念が深まり、IAEAが特別査察を要求した。これに反発した北朝鮮は、九三年三月、NPTから脱退を宣言して緊張を作り出す。

国連安全保障理事会は、北朝鮮に脱退宣言の再考を促す決議を採択。米国は北朝鮮と交渉し、（1）武力不行使（2）朝鮮半島の非核化と相互の主権尊重（3）朝鮮半島の平和統一支持―の三点で合意した。

この際、国際共同事業体「朝鮮半島エネルギー開発機構（KEDO）」が設立され、この支援の下、北朝鮮は黒鉛原子炉を軽水炉に転換し、そ

の技術支援を米国が、費用負担を日韓が行うことで合意された。北朝鮮はNPT脱退を停止（正式に復帰していない）するという口約束だけで大きな収穫を得たわけだ。

この合意が破棄され、再び緊張を作り出すのに時間はかからなかった。二回目の緊張フェーズ突入である。

米国は、北朝鮮がIAEAの核査察を受け入れる条件で北朝鮮敵視政策を放棄すると合意していた。だが、一九九四年六月、IAEAが査察不十分として全ての保障措置に関連する情報及び場所へのアクセスを要求する決議を採択した時点で、再び北朝鮮はIAEAからの即時脱退、査察拒否を表明し、合意を破棄し

て緊張を作り出した。

慌てた米国は、カーター元大統領を訪朝させて北朝鮮との交渉に臨む。その結果「米朝枠組み合意」が結ばれ、北朝鮮側は「NPTに留まり、黒鉛炉と関連施設を全面凍結、そしてIAEA保障措置協定を履行する」と約束するだけで、計二千メガワット規模の軽水炉建設というご褒美を手にし、それが完成するまでの間、年間五十万トンの重油が無償提供されるといふ一方的に有利な合意を勝ち取った。

三回目の合意破りは八年後の二〇〇二年であった。この年の十月、ジョン・フォーブズ・ケリー米国特使が北朝鮮を訪問した際、北朝鮮は高濃

縮ウランによる核開発計画を認めた。翌年一月にはNPTから脱退し、九四年の枠組み合意を破棄して再び緊張を作り出した。重油供与は停止されたが、これまでの重油供与は核開発防止ではなく、皮肉にも結果的には核開発に手を貸していたことが明らかになった。

二〇〇三年八月、新たに六カ国協議が開始されたが、協議に影響されることなく北朝鮮は粛々と核開発を続け、〇五年二月には核兵器保有を宣言している。

「緊張」の後は、お決まりの「交渉―合意」フェーズである。〇五年六月、金正日総書記は平壤で韓国の鄭東泳統一部長官と面会し、「我が共

和国（北朝鮮）は核兵器を持つべき理由がない」と突然「非核化」を表明した。これを受け、九月の第四回六カ国協議では、北朝鮮が核放棄を約束した共同宣言を採択し、その代償として北朝鮮は経済協力を勝ち取った。

5回目の破棄

この時の「合意」も、「破棄」（四回目）されるまで時間ばかりはかからなかった。〇六年七月にテポドン等ミサイルを七発発射し、十月には初めての核実験を実施した。「緊張↓交渉↓合意↓破棄」を繰り返しながら、核・ミサイル開発は粛々と進めていたことが改めて確認された。

この後も北朝鮮は「緊張」

から巧みに「交渉」に持ち込み、極めて有利な「合意」を得ている。核実験から四カ月後の〇七年二月、第五回六カ国協議で北朝鮮が原子炉停止、核施設の無力化、そして核開発活動の公表という約束だけで、重油九十五万トンの提供を受け、同時にマカオ銀行にある口座の凍結解除、テロ支援国家指定解除という大きな見返りを得た。翌年六月には、北朝鮮は黒鉛減速炉の冷却塔を爆破する「政治的シヨール」を演出した。だが、この時も核開発活動公表の約束は守っていない。

五回目の「破棄」は翌年に起きる。〇九年四月、長距離弾道ミサイル（テポドン2）を発射し、「検証手続き決

裂」でIAEA検査官全員を国外追放。六カ国協議からも脱退を表明する。五月には二度目の核実験を強行した。大きな収獲を得るには大きな「緊張」を作り出すのが効果的と言わんばかりに、二〇一〇年三月には韓国海軍の哨戒艦天安を魚雷攻撃で爆沈し、十一月には 韓国の大延坪島を砲撃した。

北朝鮮は思惑通り、この後の「交渉―合意」フェーズでは、大きな収獲を得ている。一二年二月、ウラン濃縮、核実験、ミサイル発射などの中止、そしてIAEAによる査察受け入れという口約束で再び二十四万トンの食糧援助を得たのだ。だがこの合意も、舌の根の乾かぬ内に破棄（六

回目）される。

一二年四月、北朝鮮は憲法を改正し、「我が祖国を不敗の政治思想強国、核保有国、無敵の軍事強国に変える」として核保有国を明記。また、「人工衛星打ち上げ」と称して長距離ミサイルである光明星3号を発射し、国連の非難声明発出を機に米朝間合意を破棄した。翌一三年二月には、三度目の核実験を強行している。

米国は懐疑的

これまでの騙され続けた歴史を振り返る時、北朝鮮にとって「交渉―合意」は、核ミサイル開発とは全くかわりがなく、支援を引き出すためのカードに過ぎなかったの

だ。この後は一気呵成に核ミサイル開発を進めて今日に至る。一六年一月、四度目の核実験を強行し、「水素爆弾の実験に成功」と発表。九月には五度目とされる核実験を実施し、昨年八月と九月には日本上空を通過するミサイル（火星12号）を発射した。九月には六度目とされる核実験を強行。十一月二十九日にはワシントンに届くと言われている火星15号のロケット発射を実施。

金正恩は新年の辞で「国家核戦力の完成という歴史的大業を成し遂げた」と高らかに宣言するに至った。

この火星15号は大気圏突入時の熱処理に失敗したようで、マティス米国防長官は昨

年十二月十五日、「現時点では米国に対する差し迫った脅威になっていない」「ICBM技術は完成していない」と述べている。だが、これが完成すれば、ワシントン、ニューヨークに核ミサイルが届くことになり、米国にとっては看過できない脅威となる。

ポンペオCIA長官（当時）は今年の一月二十二日、「米本土を核攻撃する能力を確立するまでに、数えるほどの月しかない」と述べているが、北朝鮮にとってはこれが完成するまでの間、なんとか時間を稼ぐ必要がある。このために宥和姿勢に転じ、南北首脳会談及び米朝首脳会談を模索しだしたに違いない。

今回も「緊張↓交渉↓合意

↓破棄」パターンの「交渉―合意」フェーズに入ったと見ておくべきだろう。

国連安保理による十回目の経済制裁は、北朝鮮にとってかなり厳しいものである。早く「交渉―合意」フェーズに持ち込み、何とか制裁を緩和させなければICBMが完成するまでにジリ貧になってしまう。

北朝鮮は平昌五輪を平和攻勢の好機と考え、「平昌五輪は民族の地位を誇示する良いきっかけとなり、大会が成功裏に開催されることを願っている」と「ほほえみ外交」を仕かけたところ、まふもと文在寅韓国大統領が乗ってきたというところだろう。

今後、南北首脳会談、米朝

首脳会談で果たして北朝鮮の非核化は達成されるのであるうか。先述通り見通しは暗いと言わざるを得ない。六回も騙され続けてきた米国も、さすがに今回は懐疑的である。米國務長官代行のサリバン副長官も「北朝鮮政権が非核化に向け、信頼できる検証可能で具体的な措置を取るまで北朝鮮に対する国際社会の圧力が続かなければならない」と述べる。安倍晋三首相は「対話による問題解決の試みは一再ならず無に帰した」とし、北朝鮮が本気で「非核化」を持ち出すまで圧力をかけ続けるべきだと一貫している。

非核化の意味

北朝鮮が「非核化」を持ち

出したのは今回が初めてではない。先述のように二〇〇五年六月、金正日総書記は韓国の鄭東泳統一部長官と面会した際、「我が共和国（北朝



中国国家主席（中央右）と金正恩委員長（同左）。両端は彭麗媛夫人（右）と李雪主夫人 = 3月26日、北京（朝鮮通信 = 時事）

で、中国が金正恩訪中を受け入れたという。訪中が実現したことは、北朝鮮から前向きな回答を得た証左だとメディアは、またぞろ楽観的だ。だが北朝鮮の「非核化」はそう単純で簡単な話ではない。中国側の発表によると、金正恩氏が「非核化の意志」を表明したものの「韓国と米国が段階的で同時並行的な措置をとるならば」という条件を付けたという。これは二〇〇三年の六カ国協議での発言とほぼ同じである。

多くの餓死者まで出しながら、強引に開発を推し進めてきた結果、ようやく手にした核兵器である。米国防情報局（DIA）は、現在保有する「核爆弾の数を最大六十発と推定」しており、「小型化、軽量化、多様化された、より打撃力の高い核弾頭を必要とだけ生産できるようになって」と述べる。金正恩委員長は「やっとな手にした核兵器をもう簡単に放棄するだろうか？ 亡命した元駐英北朝鮮公使の太永浩氏は「一兆ドル、十兆ドルを与えると言っても北朝鮮は核兵器を放棄しない」と述べる。

危険管理は最悪を想定して準備することが最も重要である。予定通り米朝首脳会談が行われても、アメリカ・ファーストを掲げるトランプ大統領は米国に届くICBM開発さえ凍結されれば、核保有容認で北朝鮮と取引する可能性もある。そうなれば、日本への脅威だけが残り日本にとって是最悪である。会談が決裂してトランプ氏が武力行使に踏み切った場合も、日本は無傷ではいられない。

鮮）は核兵器を持つべき理由がない」と「非核化」を表明している。これも簡単に反故にされたが、「非核化」については米国と北朝鮮では同床異夢である。北朝鮮の言う「非核化」は在韓米軍の撤退を意味している。在韓米軍が撤退し、朝鮮半島が北朝鮮主導で統一されれば「核兵器を持つべき理由」がなくなるということである。

この原稿を書いている時、金正恩氏が三月二十六日に北京を訪問したというニュースが飛び込んできた。報道によると、北朝鮮が核放棄に向けて取り組む姿勢を示すことになった。